



DYNAMIS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蓄

【Nコード】

N4162D

【作者名】

DYNAMIS

【あらすじ】

あらすじもなにもたった原稿用紙4枚分ですからね。ほとんどありません。書くとするならば『恋愛話の最初の「蓄」』という程度でしょう。このあたりで気づかれる方もいらっしゃると思います。ある番組でやっていたことをモチーフとし、さらにお題まで頂戴しやすく書いたものです。ただ、一人で書きました。今度また誰かと回し書きをしてみてもいいかと思いました。

僕は逃げ出した。全部が背負い込みきれなくなった。親からの期待、上司からの期待、相手先からの期待。僕は耐え切れなくなってしまったのだ。だから僕は仕事が終わってすぐ駆け出した。あてもなくただ走った。日頃の運動不足で息が上がっている。そしてここまで辿り着いた。

見知らぬ公園。なんとなくベンチではなくブランコに座る。

(僕はこの先どうなるのだろうか?)

周りの電灯が明るすぎるのか、見上げた空に星は見えなかった。思ったより三月の外は寒い。数年前から考えればずっと暖かいらしいが、それでも寒い。

(やっぱ家に帰るしかないか)

小一時間悩んだ結果が、ちよつと空しく感じた。視線を水平に戻す。その時、ふと人の気配を感じた。隣のブランコに一人の女性が座っていた。

隣の女性は笑っていた。ただ目は少し赤く腫れていて、泣きはらした後だと分かる。

「僕ってそんなにおかしいですか？」

少し怒ったように言った。

「いえ。奇遇だな、って」

彼女は悪びれることもなく即答し、笑った。

「嫌なことあってここで泣こうと思ってたら先客がいるんですもの。しかも今の私と似た思いで。笑っちゃうよね」

僕はちよつと笑ってみせた。多分ちよつときこちなかつたと思うけど。それでも彼女はより一層の笑顔を僕にくれた。

「じゃあ、私、帰るね。元気でたわ。ありがとう」

僕は彼女の後姿を見送ろうと思った。でも、僕は声をかけてしまった。

「すみません。最寄駅までの道を教えてもらえませんか？」

彼女は笑って振り向いてくれた。

「もう今日は遅いからウチに来ます？」

公園を離れてすぐに、彼女の部屋に着いた。

「さすがにベッドは貸せないけど、ソファは好きに使っていいからね」

案内されたりリビングは生活感があまりなかった。テレビとソファとテーブルだけ。

「えと、かけるのが毛布とタオルケット余ってないけどいい？」

「いえいえ、お構いなく。いきなりお邪魔しちゃいましたから」

苦笑いしながらも少し心配になった。ただ自分が心配するのもおかしい気がした。

「じゃあ、ごゆっくり」

彼女の台詞も、ホテルや旅館を連想させた。

僕はいつも自分の家のようにテレビをつけようと思った。リモコンが見当たらずしぶしぶ電源を押しに歩いた。そこで一つ見覚えのあるものを見つけた。ビデオデッキの脇にある小学校の卒業アルバム。さらに隣にもう一つ見知らぬ小学校の卒業アルバムがあった。そこで僕ははっとした。

思い当たる節がすぐ見つかった。小学校六年の初夏の思い出だ。一人の少女に「転校するんだ」と言われた。僕の初恋とも呼べる人だ

った。彼女も僕を好きでいてくれた。だからなんとか引き止められないか、子どもながらに説得した。あと一年だけ、あと一年だけなんだから一緒にいようぜ、と。また近くの公園で一緒に遊ぼうぜ、と。

ほどなくして彼女は転校した。電車で一時間の距離は、少年だった僕には遠かった。会いに行けなかった。でも僕を忘れて欲しくなかった。そこで僕は親に頼んで卒業アルバムを二冊注文した。最後のページに僕のメッセージを書いて彼女に送った。目の前の卒業アルバムを開くと、その時の下手な字があった。

『またいつもの公園で一緒に遊ぼうぜ』

『笑顔でまた会おうぜ』

僕は小さく呟いた。自室にいる彼女には絶対に届かない声で呟いた。ほんとうに奇遇だな、と。

(後書き)

いやあ、完全に投げっぱなしですね。反省してます。でも原稿用紙4枚だとこのくらいになってしまいました。短すぎです。だからテレビの彼らはすごいな、と思います。日頃ネタを書いているとか、本を出しているというのはためになることなのでしょう。今僕自身長編を書いているのですが、なかなか仕上がりにません。かれこれ4ヶ月以上。文の量もそれなりにもうすごいんですけどね。それと比べる内容はずいぶん薄いですが、そのこと以上に短時間で書けました。このペースで書けるなら短編をどんどん書いたほうが面白いんじゃないかとも、思い出しはじめてます。

などということ、長くなりましたがあとがきを閉めさせていただきます。お読みいただきましてありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4162d/>

蓄

2010年11月16日08時36分発行